愛国学園大学人間文化研究紀要　第12号　55〜67頁　2010年３月号

〔論文〕

1732年版オウィディウス挿絵本とアムステルダムの出版事情

安　室　可　奈　子

はじめに

1732年に刊行されたオウィディウスの仏語版『変身物語』（図１）は、各挿話が銅版挿絵で飾られた大部の豪華本である。論者は目下、フランソワ・ブーシェが1742年のサロンに出品した絵画作品≪ディアナの水浴≫の成立過程に、この書物の挿絵作品が関連づけられるのではないかという仮説を立て研究を進めている[1]。というのも、近年の研究において画家がこの挿絵本制作に関わっていたという新たな事実が指摘されたのである[2]。しかしながら、傍証として提示された版画にはブーシェの記銘はなく、画家や作品に関わる先行資料を概観する限りではそのことに触れている言説も一切見当たらず、その根拠は盤石ではない。

ところで、これはオウィディウスに限ったことではないが、18世紀前半期のフランス語書物の刊行状況を俯瞰すると、オランダ各都市で出版された版が顕著に存在する。ここで問題としている1732年版『変身物語』もアムステルダムで刊行された。そしてその挿絵制作にはパリから移住したフランス人画家ピカールが、オランダ人の画家・版画家たちとともに携わっていた。そこで本小論では、1732年版挿絵本とその周辺の芸術家たちについて現段階で得られている情報を整理しつつ、ブーシェ作品との接点を模索したい。

最初に、1732年に刊行されたオウィディウスの挿絵本『変身物語』の概要と構成について紹介する。第二章では、18世紀のオランダにおいてフランス語書物の出版が顕著であった事実とその背景について報告する。第三章では、この挿絵制作を指揮したピカールがパリからアムステルダムに移住した後の活動の様子や、周辺の画家について述べる。

Ⅰ．1732年版『変身物語』挿絵本について

オウィディウス『変身物語』が、とりわけルネサンス以降、数多くの西洋美術作品の文学的着想源であったことは、すでに数多くの研究において指摘されてきた。17世紀下のフランスでもプッサンを模範とする王立絵画アカデミーの形成過程の中で、この書物はますますその地位を不動のものとした。そこで繰り返し参照されたのが、16,17世紀を通じ

て挿絵をつけて刊行された『変身物語』である。

こうした伝統はルイ14世の治世が終わりを告げても継承された。つづく18世紀の挿絵芸術の開花にともない、『変身物語』は絵画作品の視覚的着想源としてますます重要な存在となっていった[3]。このような流れの中この物語は挿絵本として、18世紀の最初の40年間に９点の異なる版が刊行されたことが分かっている（資料)。中でも1702年と1732年にアムステルダムで刊行された２つの版は、大型のフォリオ版で、各エピソードに挿絵のつけられた豪華本であった。

本論考で問題としている1732年版は目下、フランス国立図書館（Bnf)、グラスゴー大学図書館等の貴重図書室、およびロンドン大学ウォーバーグ研究所で所蔵を確認している[4]。おおよそ縦47cm×横32cmの二巻本である。扉の部分には表題として『オウィディウスの変身物語』とあり、「ラテン語版からの仏語訳、王立碑文・文芸アカデミー会員のバニエ神父による注釈と歴史解説付、B.ピカールと腕利きの巨匠たちが版刻した銅版挿絵によって装飾された書物」と続けて記されている。刊行は、アムステルダムのR.＆J.ウェットシュタインとG．スミスである。

この２つの出版業者については、メロ&ケヴァル『印刷業者・書店総覧』で少ないながら活動の様子を窺い知ることができる。ルドルフ・ウェットシュタインとヤコブは親子で、1701年以降アムステルダムで出版業を営んでいた。一方、スミスはベルファスト出身の本屋で、1725年にアムステルダムで活動開始、以降ウェットシュタインと共同で書物の刊行・販売に携わっていたことが分っている[5]。

総ページ数は約540頁で、全131点の銅版画が挿入されている。巻頭挿絵はピカールによるもので、ナルキッソス、アポロンとダフネ、イカロスなど、変身物語の様々なエピソードが一枚の画面に描きこまれている（図２)。バニエによる全２ページの献辞にも挿絵が添えられており[6]、これには若きルイ15世の肖像の上にムーサが月桂樹の王冠をかざし、ミネルヴァや時の翁と共に礼賛する様子が表現されている（図３)。挿絵下部の記銘には大きく「王に（捧ぐ)」(AU ROI.）とあり、この挿絵本が国王による出版允許を伴うものではなかったにせよ、国王献上本としての性格を有していたことを示している。

挿絵とテクストの構成は、基本的に各主題（Fable）が見開き２ページで完結し、１ページ目の上半分を占める銅板画が添えられている（例外有)。挿絵の上には主題名、下には３，４行のあらすじがフランス語で記され、その後に本文が続いている。本文は二段組みで、左側がラテン語、右側がフランス語の対訳形式となっている。

131点の挿絵には、作者の記銘のあるものとないもの（または部分的に記載されているもの）が混在している。このうち、特に下絵作者の記載が欠けている挿絵の中には、カラッチ[7]やルーベンス[8]ら巨匠の構想を借用して版刻されたものも見受けられる（図４・図５)。こうした作例群においては、まったく署名がないか、あるいは版刻家の名前だけが記されている場合が多数である[9]。一方、銘のある作品からは、主にピカールとその周辺で活躍していたオランダ人画家・版画家たちが２，３人のチームを組んで一枚の挿絵制作に携わっていたことがわかる[10]。この他に、ル・

ブランの絵画に基づく挿絵も数点確認されている（図6）[11]。

一方、先行する挿絵本との影響関係も少なからずみとめられる。先述したように、1702年に同じアムステルダムで刊行された挿絵本は、判型や内容構成、掲載されている挿絵の点数などに1732年版との共通点が多く、注目すべき版といえる（図7）[12]。例えば第3章第3話の「ディアナとアクタイオン」の主題を描いた両版の挿絵を比較すると分かるように、1732年版が1702年版から構図を借用し細部のみ若干変化させている事実が確認できるのである（図8・図9）。ただしその1702年版は、1677年にブリュッセルで刊行された版に掲載された、レンブラントの下絵に基づく版画と全く同一の挿絵を用いている[13]。このことから、17世紀後半にフランドル・オランダで発生した図像が、1702年の挿絵本を媒体に1732年版へも継承されていたことがわかる。

1732年版に顕著にみとめられる北方芸術の傾向は、17世紀フランス・アカデミーに影響を与えたと指摘されている『変身物語』挿絵と比較してみる時、より明白に理解することができる。ここでは、先に例を挙げた「ディアナとアクタイオン」の主題において、1651年にパリで刊行された版の挿絵と比較してみたい（図10）[14]。これは、アクタイオンが狩りの途中で偶然水浴中のディアナに対面したことで、女神の怒りを買い、鹿に変身させられるというエピソードである。1651年版では、画面がクローズアップし人物が前景に大きく描かれている。親密性を増した空間では、左側のアクタイオンが片手をあげて驚きを示す身振りをし、ディアナは彼を指さして恥辱に対する怒りを表している。どれも一様に描かれた数人のニンフたちの中で、2人の主役の感情表現が強調されている[15]。アクタイオンの頭部から大きく伸びた鹿の角、ディアナの頭部に目立つように描きこまれた三日月の飾りも、主題内容を明確に表現するものとなっている。対して図8の1732年版では、様々な身振りをして慌てふためいている13人の裸婦の中に紛れ込むようにディアナが描かれている。同様に、もう一人の主人公であるはずのアクタイオンが後景に印象弱く描きこまれていることからも、主題としての明瞭性というよりは、女神とニンフたちの水浴の情景を入念に表現することに重点が置かれていると言えよう。このように画面構成の点からみても、1732年版の挿絵はルネサンス以来継承されてきた図像伝統とは一線を画し、ルーベンス、レンブラントら17世紀バロック美術を牽引した北方の巨匠たちの絵画を下敷きにしていることがわかるのである。

Ⅱ．フランス語書物のオランダにおける出版

フランス語書物のオランダでの出版については、ベルクヴェンス=ステーヴェリンクの論文に詳しい[16]。1660年から1780年にかけて、アムステルダムを筆頭にライデン、ユトレヒト、ロッテルダム、デン・ハーグ等の都市で、あらゆるジャンルのフランス語書物が刊行された。1720年代の汎ヨーロッパ的な経済危機によって、フランスでの出版数も大きな影響を受けた。この波が1740年ごろに到達するまでの約20年間、オランダはフランス語書物の出版基地としてさらに重要な存在であったことは間違いないだろう。

こうした中で、とりわけ挿絵入り書物の刊行は、オランダ出版業界に適応した。17世紀下のヨーロッパで挿絵本の水準が質量ともに頂点にあったのは、間違いなくフランスであった。ところが、そのフランスから亡命してきた者たちが状況を変えたのである。ベルクヴェンス=ステーヴェリンクが、そこで例として挙げている人物が、本論考でも問題としているピカールである。18世紀前半にアムステルダムで一派を築いたとされているピカールは、同地の出版業界の新たな飛躍において重要な役割を果たしたと考えられているのである。

オランダの出版業は、非常に国際色豊かであった。英語やドイツ語書物を専門とする業者もいくつかあり、すべての業者はラテン語、フランス語、オランダ語、その他の外国語を区別せず出版していたという。1680年以降、フランス語書物の割合は次第に増加していった。こうした書物を取り扱っていた主な業者の名前も具体的に挙げられている。フランスを出自とする者たちの中では、シャルル・レヴィエ、ピエール・パウピ、ピエール・ゴス[17]など。他に、英国人のトーマス・ジョンソン、ドイツ人のガスパール・フリッヒ、そしてオランダを母国とする者たちとしては、レール一家、モエットイェン、ファン・デュレンなどがいた。こうしたオランダ人出版業者たちは、完璧なフランス語技能を用いつつ高水準の校正作業を行ったという。オランダではすでに16世紀ごろから博識豊かな編集者が世間の敬意を集めていたが、18世紀には書店がその役割を担った。それこそがオランダで出版される書物の質を確固たるものとしていた。

オランダでも、書物の形態は様々で、仮綴本のままのものや、ルリユールが施されたものもあった。特にオランダ国外に輸送する必要のあった出版物は、現地に到着してから製本されたという。フランスの場合、ルーアンやヴェルサイユが、こうしたオランダからの出版物を製本する専門業者の中心地であった。著者が王族などの重要人物に寵遇される目的で献上する場合には、とりわけ豪華な装丁が施された。稀覯書収集家などのためにオランダで製本が行われる場合は、現地の工房または多数の亡命フランス人にこれらの業務が託された。

当時の一般的な広告方法としては、17世紀末ごろから発展した文芸雑誌、出版図書目録、文芸批評選集、読者便り、新聞等が挙げられる。こうしたオランダ国内発行の新聞や雑誌類をフランスの読者層は競うように読んでいたことから、そこで広告される新刊の情報が広く迅速に行き渡っていたと指摘されている[18]。

図書の流通について、各書店が発行する出版目録の記述によれば、各々が取り扱っている新書や古書を互いに流通させて販売していたことがわかっている。フランスから亡命した人々の蔵書コレクションも、その際、国境を越えオランダに渡った。こうしたフランス語の書物を、現地で復刊するために小売していたことも分かっている。フランス・オランダ間の書物の往来には、国境が存在しなかったとほぼ言ってよいだろう。また、オランダで出版された書物がフランスに送られたのも、こうしたフランス人亡命者たちを介してであったことが報告されている。オランダでは判型が小さな書物がさかんに刊行され、こ

れが低価格の由縁であった。しかしながら、実際にはこうした小型本の出版で得られる利益は大変少なく、それを補うのが大型本刊行によって出る収益だったという[19]。本論考で扱う1732年版や1702年版のような豪華挿絵本は、そうした意味でも現地の出版業者たちにとって力のこもる仕事だったに違いない。

Ⅲ. ピカールとアムステルダムの芸術家たち

本章では、1732年版オウィディウス挿絵本を指揮したとされるピカールとその周辺の画家たちについて触れる。いずれもその活動を物語る資料群は決して豊富とは言えないが、それらの基礎データをまとめておくことで、1732年版挿絵本の成立過程を探る一助としたい。

①ベルナール・ピカール

ベルナール・ピカール（Picart, Bernard, 1673-1733）は1673年に版画家エティエンヌ・ピカールの息子として生まれた。セバスチャン・ルクレルク[20]（Leclerc, Sébastien, 1637-1714）に師事し、17世紀フランスの「偉大なる様式」を叩き込まれた。レオーによれば、ルイ14世の治世の終わりごろになると、多くの芸術家たちと同様注文がほとんど来なくなり、年老いた父と共にオランダに移住することを決意したという[21]。フランス語書物の出版業が盛んであった同地での、利益の多い仕事を期待してのことであった。そして、1733年に60歳で没するまでアムステルダムで活動をする[22]。レオーは、ピカールが太陽王からルイ15世への時流の変化に、最も上手に順応していった芸術家であると評価している。そしてその代表作として1732年『変身物語』の扉絵を紹介し、これが18世紀中に非常に数多く刊行されることになる同タイトルの挿絵本に先立つものであり、新しい様式の訪れを告げるものであると評した。

ピカールについてこれまでのところ最も遡る証言は、1767年のバザン『版画家辞典』における記述である。バザンもレオーと同様、ピカールが絵筆の確かな技術を有しつつも、「偉大なる様式」（Sans être dans le grand style）ではなく「喜びの様式」（étoit faite pour plaire）で制作したと述べ、バロックからロココへの転換期にあって新たな時代を代表する画家であると位置付けた。勤勉で、素描の完成度は非常に高く、その多くが画家自身の手によって版刻化された。そうした版画作品の主なものがリストアップされている。その中にはもちろん1732年版『変身物語』の扉絵制作も紹介されているが、他にも様々なジャンルの書物の挿絵制作に従事していたことがわかる[23]。こうしたピカールの精力的な画業については、ル・ブラン『版画愛好家便覧』（1888年）において、主題のジャンル別に区分けされた作品群が649点にものぼることからも、生々しく窺える[24]。

この画家のアムステルダムでの活動について、ポルタリスが『18世紀の挿絵画家たち』（1877年）の中で詳述している[25]。それによればピカールはアムステルダムで下絵画家、版画家、そしてまた版画商として身を立てた。第二章でも述べたように、オランダの印刷業界は17世紀にすでに大きな成功を収めていた。その成功は次世紀になっても続き、新版の刊行が矢継ぎ早であった。アムステルダムの出版業者たちは、ピカールへ競い合うよう

に大作の企画提案をしたという。人の良い性格と並みはずれた活力を天賦として備えていた画家は、出版業者たちが準備していた大部の出版物に必要となる挿絵の下絵や版画制作をするべく、まさに絶好の時期にオランダへやってきたのである。そして彼は数多くの下絵素描や版画に着手し、同地で期待通り潤沢な収入を得た（図11）。

オランダでの代表作としてポルタリスは、ボワロー著作集（1718年）、『聖書の登場人物たち』（1720年）、『世界の全民族の宗教儀式と衣装』（1723-43年、ピカールの死後に刊行）などを挙げているが、その他、アムステルダムやデン・ハーグで刊行された科学、芸術、歴史、地理などあらゆるジャンルの出版物のために、小さな挿絵や文字装飾から扉絵まで制作した。1732年に刊行された『変身物語』挿絵本も、まさにこのようなオランダの出版業者との協力体制において、画家として最も脂が乗った時期に企画、着手されたと考えられる。しかしながらこの出版後まもなく、ピカールは60歳でその生涯を閉じることとなった。

②アムステルダムの芸術家たち

フランスから移住し、アムステルダムで精力的に制作を続けたピカールの周辺には、これに協力した現地の画家たちの存在があった。ピカールの下絵を版刻した版画家としては、フランス人のシュルグ（Surgue,Louis ,1686-1762）やオランダ人のフォルケマ[26]（Folkema, Jacob, 1692-1767）といった名前が直接の弟子としてあげられている[27]。

1732年版『変身物語』の挿絵では、先述のようにいくつかの芸術家たちの組み合わせが散見されるが、ここではブーシェ作品と関わる挿絵にみられる「G.マース構想/ウィト下絵/ヴァンデラール版刻」という３名の署名に注目したい。まず、マース（G.Maas）という画家については、これまでの調査ではその身分さえ特定できていない。次に、版刻担当のヴァンデラール（Wandelaer, Jan, 1690-1759）は、先述のフォルケマの弟子であったことを確認しており、ピカールの孫弟子であったことが縁で1732年の挿絵制作で版刻を担当したと考えられる[28]。

ウィト（Wit, Jacobe de, 1695-1754）については、比較的、その活動の様子を知ることができている[29]。アムステルダムで生を受けたこの画家は、９歳の時、画家の修業を始めた。この時に師事したスピエルス（Spiers ,Albert van,1666-1718）は天井画を専門とし、ローマではライレッセ[30]（Lairesse, Gerard de ,1640-1711）に学んだ画家であることがわかっている。その後、1708年よりアントワープで学び、1709年から1712年まで物語画家のハル（Hal ,Jacob van 1672-1750）に師事した。この時期、アントワープのイエズス教会（現在の聖カルロ・ボローメオ教会）でルーベンスが構想した天井画を模写し、36点の素描を制作する（後に焼失）。1713年には同地の聖ルカ組合に登録されている。アントワープ滞在中にルーベンス作品にじかに触れた経験は、その後アムステルダムに戻って後も生かされた。ロココ様式の天井画や室内装飾、自然主義的な彩色画やグリザイユで描いた浮き彫り風の絵画におけるプットーの群像（図12）を得意とし、オランダ装飾美術を牽曳した画家と評価されている[31]。

このように画家は、オウィディウス挿絵の

制作に関わっていた1730年前後には、すでにアムステルダムでは独り立ちして活動していた。ピカールとの直接的な接点についてはわかっていないが、公的な仕事を通じてその存在については認識があったであろうし、何らかの機会に知己を得たとしても不思議な話ではない[32]。

また、ウィトのその他の情報で、その多数の油彩習作がルモワーヌやブーシェなどフランス人画家のものとして売られていたことにも注目しておきたい[33]。図12でも示したように、プットーの表現のみを比較してみても、ブーシェの作風との類似点は多いにみとめられる。しかしながらここで指摘しておきたいのは、ブーシェがまだ修行時代であった1720年代後半にはウィトはルーベンスの影響を受けてすでにこうしたプットーを数多く描いており、影響を受けたのはむしろブーシェの方である可能性も否定できない。両者の接点については、別の機会で触れたいと考えている。

おわりに

以上、1732年版オウィディウス挿絵本とその成立について述べた。挿絵の内容にルーベンスら17世紀北方芸術の影響が色濃くみとめられること、またこの書物が当時出版業の盛んであったアムステルダムで刊行されたこと、それはピカールとオランダ人芸術家たちの密な共同作業の上に成り立っていたこと、これらのどの事実をとってみても、この挿絵本は、17世紀フランスの画家たちが参照していたルネサンス以来の伝統的なオウィディウス挿絵本とは一線を画している。また、新聞や出版目録などの情報が広く普及していたため、オランダで出版された書物をフランス国内で入手することは、読者にとって難しいことではなかった。こうした独特の出版史的・地理的条件を背景に、フランスへ半世紀遅れて到達したと言われているバロック美術の影響は、まさに出版芸術の分野にも及んでいたと言えるだろう。そしてもちろんこれは、アカデミーの絵画作品の成立過程とも深く関わる問題である。

今後の課題として、ブーシェとピカールやウィト等との接点、ディアナ図像に絞り込んだ挿絵の詳細な比較・分析が必要と考えている。序論でも述べたように、本小論をブーシェ作品の視覚的着想源を明らかにするためのちいさな布石のひとつとしたい。

資料　1700～1740年までに刊行された仏語版『変身物語』挿絵本リスト

1701 *LES METAMORPHOSES D'OVIDE, AVEC DES EXPLICATION à la fin de chaque fable, TRADUCTION NOUVELLE Par M.L'Abbé de Bellegarde,* I, Paris, P. Emery [Bnf:YC6702]. （1701年には、他にBrunetから同タイトル、同判型の刊行）

1701 *METAMORPHOSES D'OVIDE EN RONDEAUX Par Mr. DE BENSERADE. IMPRIMEZ PAR ORDRE DE SA MAJESTE Et dediez a Monsieur LE DAUPHIN,* Paris, S. M. Cramoisy [Bnf:YC-6706]（1676年の復刻）.

1702 *LES METAMORPHOSES D'OVIDE EN LATIN ET FRANCOIS, DIVISEES EN*

XV LIVRES...DE LA TRADUCTION DE Mr. PIERRE DU-RYER PARISIEN, DE L' ACADEMIE FRANCOISE, Edition nouvelle,enrichie de tres belles figures, Amsterdam, P. et J. Blaeu, Janssons a Waesberge, Boom et Goethals.

1704 *LES METAMORPHOSES D'OVIDE TRADUITES EN FRANCOIS PAR Mr. DU-RYER, De l'Académie Françoise AVEC DES EXPLICATIONS à la fin de chaque fable AUGMENTEES EN CETTE DERNIERE Edition du Jugement de Paris, & de la Métamorphoses des Abeilles ENRICHIES DE FIGURES en taille douce,* I, Paris, La Veuve de C. Barbin [Bnf:YC6718].

（1704年には、他にOsmont, Emeryの２社から同タイトル、同判型の刊行）

1714 *METAMORPHOSES D'OVIDE EN RONDEAUX, Imprimez PAR ORDRE DE SA MAJESTE, Dediez à MONSEIGNEUR LE DAUPHIN,* Utrecht, G. Van de Water. [Bnf: 8-YC-778]

1728 *LES METAMORPHOSES D'OVIDE EN LATIN ET FRANCOIS, DIVISEES EN XV LIVRES...DE LA TRADUCTION DE Mr. PIERRE DU-RYER PARISIEN, DE L' ACADEMIE FRANCOISE, Edition nouvelle,enrichie de tres belles figures,* I, La Haye, P.Gosse & J.Neaulme. [Bnf: YC-6727]. (1702年の縮小版)

1732 *LES METAMORPHOSES D'OVIDE, EN LATIN, TRADUITES EN FRANCOIS AVEC DES REMARQUES ET DES EXPLICATIONS HISTORIQUES. Par Mr. L'ABBE BANIER, DE L'ACADEMIE ROYALE DES INSCRIPTIONS ET BELLES LETTRES, Ouvrage enrichi de Figures en taille douce. Gravées par B. PICART & autres habiles maîtres,* I, Amsterdam , R. et J. Wetstein et G. Smith. [Bnf: RES G-YC435] (1732年版は、英訳版と縮小版が同時刊行).

1737 *LES METAMORPHOSES D'OVIDE, TRADUITES EN FRANCOIS AVEC DES REMARQUES ET DES EXPLICATIONS HISTORIQUES. Par Mr. L'Abbé BANIER, de l'Académie Royale des Inscriptions & Belles Lettres, NOUVELLE EDITION, Augmentée de la Vie d'Ovide,& enrichie de Figures en taille-douce,* Paris, Huart.[Bnf:YC6741] (1737年には、他にRouy, Piget fils, Nyon filsの３社から同タイトル、同判型の刊行)

1738 *LES METAMORPHOSES D'OVIDE, TRADUITES EN FRANCOIS AVEC DES REMARQUES ET DES EXPLICATIONS HISTORIQUES. Par Mr. L'Abbé BANIER, de l'Académie Royale des Inscriptions & Belles Lettres, NOUVELLE EDITION, Revûe, corrigée, augmentée de la Vie d'Ovide & du Jugement de Paris, enrichie de Figures en taille-douce,* Paris, NYON, etc,.[Bnf:YC6749]

1　当該知見は、美術史学会全国大会（2009年５月29日、京都大学）における口頭発表「フランソワ・ブーシェ《ディアナの水浴》:1732年版オウィディウス挿絵本と投影された「恋のエピソード」」において初めて提示した。

2　LAING (A.) , " Boucher, François " ,

Dictionary of Art, IV, New York ,Grove, pp.511-519.,1996; LEWIS (J.-N.) , '' Book Illustration'' *,ibid.,* IV, pp.360-361, 1996.

3 REAU (L.) , *La gravure d'illustration; La gravure en France au XVIIIe siècle,* Paris et Bruxelles, G. Van Oest, 1928,.

4 *LES METAMORPHOSES D'OVIDE, EN LATIN, TRADUITES EN FRANCOIS AVEC DES REMARQUES ET DES EXPLICATIONS HISTORIQUES.* Par Mr. L'ABBE BANIER, DE L' ACADEMIE ROYALE DES INSCRIPTIONS ET BELLES LETTRES, Ouvrage enrichi de Figures en taille douce. Gravées par B. PICART & autres habiles maîtres, I, Amsterdam , R. et J. Wetstein et G. Smith, 1732. [Bnf: RES G-YC435]. なお、ウォーバーグ研究所およびグラスゴー大学図書館に所蔵されている版は同時期に刊行されたこの英語版である（War-nch412-L.S /Sp Coll Hunterian Bn.1.3-4)。英語版の判型、文章構成、挿絵、ページ数等は仏語版と全て同じである。

5 MELLOT (J.-D.) , et QUEVAL (E.) , *Répertoire d'imprimeurs / libraires (vers 1500-vers1810)* , Paris, Bibliothèque nationale de France, 2004, p.508/563.

6 挿絵はL.F.D.B.の下絵に基づき、B.Bernaertsによって版刻されている。

7 第３章第８話の「バッカスの勝利」は、カラッチがローマのファルネーゼ宮殿に描いた同主題のフレスコ画に人物表現やその構想が酷似している。

8 第１章第17話「孔雀の羽根につけられるアルゴスの眼、、」は、ルーベンスが1611年に描いた同主題の絵画（ケルン、ヴァラルフ＝リヒャルツ美術館蔵）をほぼそのまま踏襲している。

9 その版刻家は、ほとんどがPhil.a Gunstである（Gunst, Pieter Stevens van, 1659-ca.1724）.

10 うち最も多い組み合わせの銘は「B.Picart direxit /Phil.a Gunst Sculpsit」で、次に「G.Maas inv. /J de Wit Delin. / J.Wandelaar fecit」が散見される。

11 第８章第４話「メレアグロスとアタランテ」は本挿絵本の中では珍しくひとつの挿話に７点の挿絵がつけられているが、それらはすべてル・ブランの作品に基づきピカールの弟子フォルケマが版刻している。フォルケマについては、第三章を参照。

12 *LES METAMORPHOSES D'OVIDE EN LATIN ET FRANCOIS, DIVISEES EN XV LIVRES...DE LA TRADUCTION DE Mr. PIERRE DU-RYER PARISIEN, DE L'ACADEMIE FRANCOISE, Edition nouvelle,enrichie de tres belles figures,* Amsterdam, P. et J. Blaeu, Janssons a Waesberge, Boom et Goethals, 1702.

13 *Les métamorphoses d'Ovide...,* Bruxelles, F. Foppens, 1677 [Bnf:yc-85] . なおこの事実についてはルヴァインの論文を参照 LEVINE,S.Z., " Voir ou ne pas voir: Le mythe de Diane et Actéon au XVIIIe siècle'' , *Les Amours des dieux; La peinture mythologique de Watteau à David,* par BAILEY,C.B., Paris, R.M.N 1991, pp.LXXIV.)

14 *Les Metamorphoses d'Ovide : Traduites en prose française, et de nouveau soigneusement reveué, corrigées en infinis endroits, et enrichies de figures à chacune Fable. Avec XV. Discours contenans l'explication morale et historique. De plus Outre le Jugement de Paris, augmentees de la Metamorphose des Abeilles, traduite de Virgile de quelques Epistres d'O'vide, et autre diuers traitez,* Augustin Courbb Paris, 1651. 同挿絵は、ジャン・マテウスやイザーク・ブリオらによって制作された。

15 新畑泰秀氏の研究によれば、1651年版の挿絵は、1619年に刊行された版を用いており、ベルナール・サロモンやフィルジィル・ゾリスらによる、16世紀より脈々と続く挿絵の図像伝統が忠実に継承されている。（『平成12年度-14年度文部省科学研究費補助「基礎研究（B）一般（１）：17世紀フランスにおける挿し絵本と絵画の関係についての総合的研究」課題番号12410020 研究成果報告書』、研究代表者：木村三郎、研究分担者：小野崎康弘、栗田秀法、新畑泰秀、2003年３月）

16 BERKVENS-STEVELINCK (C.) , "L'édition française en Hollande" , MARTIN et CHARTIER, *Histoire de l'édition française,* II, 1984 , pp.403-417.

17 ゴスは、1728年にデン・ハーグで『変身物語』挿絵本を共同出版している。これは1702年版を縮小したものだった（*LES METAMORPHOSES D' OVIDE EN LATIN ET FRANCOIS, DIVISEES EN XV LIVRES...DE LA TRADUCTION DE Mr. PIERRE DU-RYER PARISIEN, DE L'ACADEMIE FRANCOISE, Edition nouvelle,enrichie de tres belles figures,* I, La Haye, P.Gosse & J.Neaulme. [Bnf: YC-6727]）.

18 BERKVENS-STEVELINCK , *ibid,*1984,p.407.

19 BERKVENS-STEVELINCK , *ibid,*1984,p.409.

20 ル・クレルクについては、以下の文献を参照；PREAUD（M.）, *The Dictionary of Art,* XIX, Grove, 1996, pp.33-34.

21 プレオーによれば、1696～1698年にアントワープやオランダに滞在して挿絵制作の仕事をした経験が、オランダ移住を決意するきっかけとなったようである。1710年にはすでにハーグでその所在が確認されており、その数年後にアムステルダムに定住した（PREAUD, M., *Dictionary of Art,* XXIV, Glove, 1996, p.712）

22 REAU（L.）, *op. cit.,* 1928, pp.11-12,37.

23 BAZIN（F.）, *Dictionnaire des graveurs anciens et modernes,* II, Paris, De Lormel, etc, 1767 ,pp.376-379.

24 LE BLANC（C.）, *Manuel de l'amateur d'estampes,* Ⅲ, Paris, E. Bouillon, 1888, pp.190-195.

25 PORTALIS（R.）, *Les dessinateurs d' illustrations au dix-huitième siècle,* II, Paris, D. Morgand et C. Fatout, 1877, pp.501-513.

26 フォルケマについては、以下の文献を参照；SCHUCKMAN（C.）, *The Dictionary of Art,* XVIII, Grove, XI, 1996, p.241.

27 PORTALIS, *ibid.,* II, 1877, p.503.

28 ヴァンデラールについては以下の文献を参照；BAZIN, *op.cit.,* II, 1767,p.554 ; NAGLER（G.K.）, *Die Monogrammisten,* IV, Munchen, G. Franz, 1858, p.198 ; BLANC, op.cit., IV, 1890 , pp.173-174.; THIEME（U.）& BECKER（F.）, *Allgemaines Lexikon der Bildenden Künstler,* XXXV, 1942, p.141; WURZBACH（A. von）, *Niederländisches Künstler-Lexikon,* II, B.M. Israel, Amsterdam, 1968, pp.840-841; BENEZIT（E.）, *Dictionnaire critique et documentaire des peintres sculpteurs dessinateurs et graveurs,* XIV, Gründ , 1999, p.427.

29 ウィトについては以下の文献を参照：BAZIN, *op.cit.,* II, 1767,pp.562-63; THIEME & BECKER, *op.cit.,* XXXVI, 1947, p.113-114; WURZBACH, *ibid.,* II, 1968, pp.890-891; Exp.Cat.: *Dutch Masterpieces from the eighteenth Century: Paintings & Drawings 1700-1800,* Mineapolis Institute of Arts, etc., 1971.12-1972.3, pp.114-115; 佐々木英也（監）,『オックスフォード西洋美術事典』, 講談社, 1989, p.148 ; LEISTRA（J.E.P.）, *The Dictionary of Art,* XXXIII, Glove, 1996,pp.261-262; BENEZIT, *op.cit.,*XIV, 1999, pp.666-667.

30 ライレッセについては、以下の文献を参照；ROY（A.）, *The Dictionary of Art,* XVIII, Grove, 1996, pp.650-653.

31 LEISTRA,*ibid.,* XXXIII, 1996,pp.261-262.

32 『芸術家人名事典』（ULAN）の記録から辿ると、ウィトが師のスピエルスを通じて影響を受けていたライレッセには、ピカールの弟子であったオランダ人画家デュブール（Dubourg, Louis Fabricius, 1693-1775）も師事していた事実が分かっている。

33 例えば、ウィトが1725年に描いた天井画（ロッテルダム、ボイマンス・ファン・ボーニンゲン美術館所蔵）のための油彩習作《別れ道のヘラクレス》（パリ、ジャックマール=アンドレ美術館所蔵）に「f.Boucher 1753」とある偽のサインも後に付け加えられたものであるという（LEISTRA,*ibid.,* XXXIII, 1996,p.261）.

補遺：本論考は平成19-21年度科学研究費補助金・基盤研究（C）課題番号19520112（研究代表者：木村三郎）の助成を受けて、その成果の一部を発表したものである。

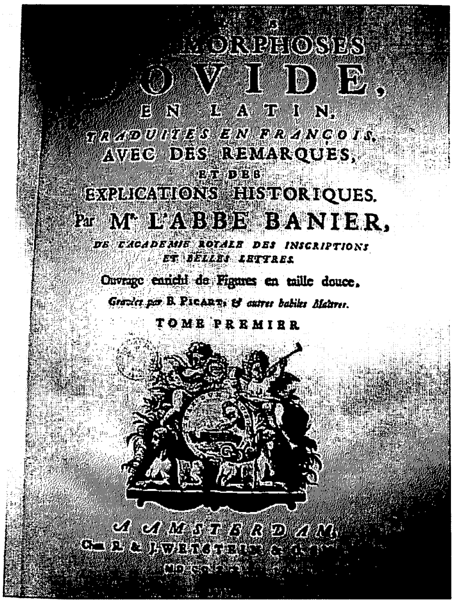
MORPHOSES
OVIDE,
EN LATIN,
TRADUITES EN FRANCOIS,
AVEC DES REMARQUES,
ET DES
EXPLICATIONS HISTORIQUES.
Par Mr L'ABBE BANIER,
DE L'ACADEMIE ROYALE DES INSCRIPTIONS
ET BELLES LETTRES.
Ouvrage enrichi de Figures en taille douce,
Gravées par B. PICART, & autres habiles Maîtres.
TOME PREMIER.
A AMSTERDAM,

図１　1732年版オウィディウス『変身物語』の扉

図２　ピカールの巻頭挿絵（『変身物語』、1732年）

図３　≪王に捧ぐ≫ L.F.D.B.の下絵に基づくB. Bernaertsの版画（『変身物語』、1732年）

図４a　≪バッカスの凱旋≫　記銘なし（『変身物語』、1732年）

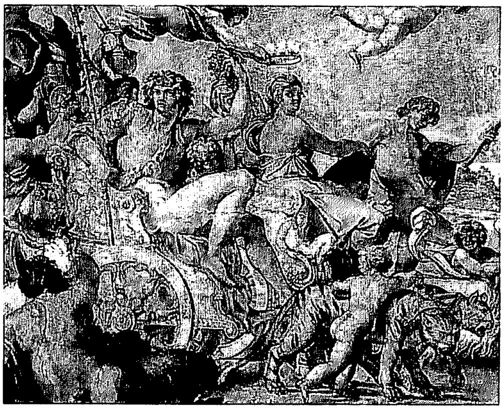

図４b　A. カラッチ　≪バッコスとアリアドネの凱旋≫ 1597-1600年 フレスコ，天井画 2014×659cm（全体）ローマ，パラッツォ・ファルネーゼ

図５a　≪孔雀の羽根につけられたアルゴスの眼≫ 記銘なし（『変身物語』、1732年）

図５b　ルーベンス《ユノとアルゴス》1611年頃 油彩,画布 249 x 296 cm　ケルン，ヴァルラフ＝リヒャルツ美術館.

図６a　≪メレアグロスとアタランテ≫ ル・ブランの下絵に基づくフォルケマの挿絵（『変身物語』、1732年）

図６b　ル・ブラン　≪メレアグロスとアタランテの狩猟≫ 1658年頃 油彩，画布　310×511cm パリ，ルーヴル美術館

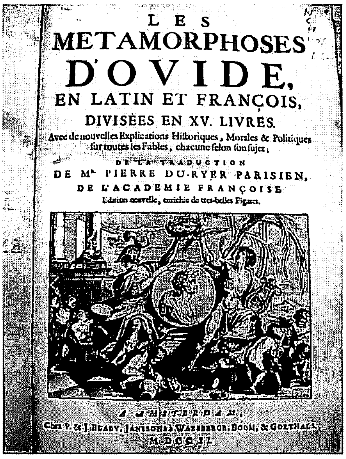

図７　1702年版『変身物語』の扉

図10　≪ディアナとアクタイオン≫、I.ブリオ版刻（『変身物語』、1651年）

図８　≪ディアナとアクタイオン≫、記銘なし（『変身物語』、1702年）

図９　≪ディアナとアクタイオン≫、記銘なし（『変身物語』、1732年）

図11　ピカール　≪歴史大事典を編纂する歴史の寓意≫　1726年　紙，銅板画　37×21cm　アムステルダム国立美術館

図12　ウィト　≪鏡を持つプットーたち≫　1725-44年　画布・油彩　30×35cm　アムステルダム国立美術館